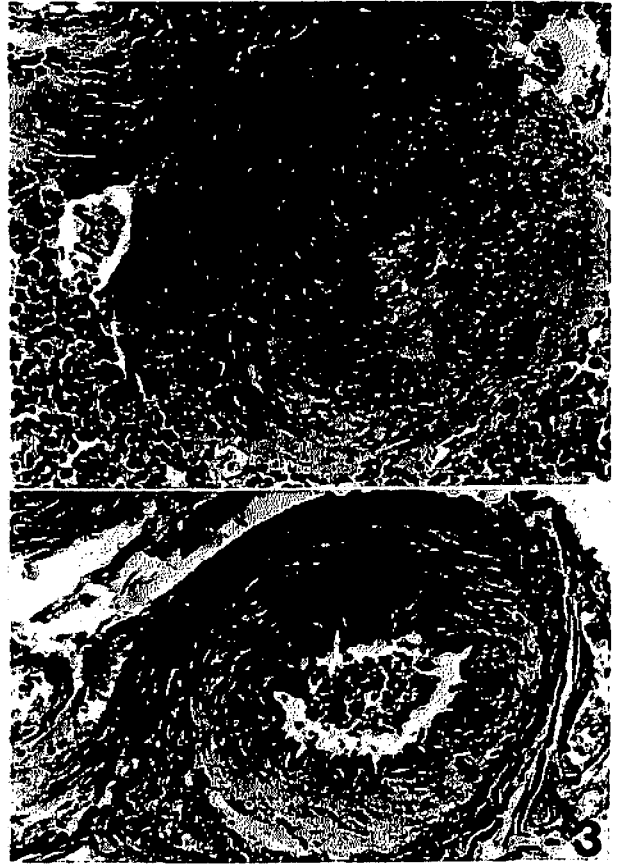


豚の精巢

東京農工大学家畜病理学教室出題

第28回獣医病理学研修会標本No.496



動物：豚，ゲッチングミニチュアピッグ種（いわゆるミニ豚），雄，約10才（体重48kg）。

臨床的事項：本例は本学家畜薬理学教室の実験動物として繁殖用に供されていた。斃死（1986年3月3日）約1ヶ月前には種付けに供用された。しかし種付後次第に元気消失，食欲不振（斃死前日まで僅か食欲があったが），歩様踴躍となった。

剖検所見：剖検の開始は死後約30時間であった。顎凹より下腹部，会陰に及ぶ領域の皮膚には限界不明瞭な赤色斑の蔓延が認められた。腹部の全領域の皮膚には直径1ないし1.5cmの痂皮形成を伴う潰瘍病変が散在性にみられた。心臓（280g）は両心房及び両心室の拡張を示し，精巣を除く他臓器には著変はなかった。

精巣は左側が長径8cm，右側が長径5cmで，右側精巣は萎縮していた。左側精巣の断面は精巣の固有色を失い，厚い被膜に覆われた茶褐色の腫瘍性組織を思わせる腫瘤によって占有されていた。断面の一部には直径3cmの壊死巣と思われる乾燥性の病変と，直径7mmの，外周に出血のみられる結節性病変が存在していた。萎縮した右側精巣断面では結合組織性成分が多く，精巣固有実質組織は減少しているようにみえた。その断面には径が5mmから1cm程の限界明瞭な茶褐色結節性病巣が散在し同病巣は結合組織により被包されていた。

組織所見：腫瘍組織はシート状に増殖した細胞集団より成り，増殖した細胞は大小やや不揃いの円形ないし楕円形の核を持ち，クロマチンは豊富で，細胞質は好酸性で異型性を示し，容易に腫瘍細胞であることが判明した。この腫瘍細胞の集団には多数の空隙，裂隙があり，各空隙及び裂隙内にはフィブリン，蛋白成分を含む液状物及び赤血球を容れていた。また部位によってはヘモジデリンを含有する細胞が多数みられた（写真1，HE染色）。腫瘍内には血管の分布が多く，稀に腫瘍細胞は小動脈周囲に矢来状に配列していた。

一方，腫瘍組織内における小動脈は強い内膜肥厚を示し，管腔の狭小化ないしは閉塞を示していた（写真2，EVG染色）。これらの血管内膜の肥厚の主体は平滑筋細胞の増生で，増生した平滑筋細胞は縦走性配列を示し，内膜における平滑筋は求心性に増生しているようであった。また肥厚した内膜では膠原線維増生もみられ，膠原線維が平滑筋細胞を圍繞していることもあった。しかし，弾性線維の増加はなかった。これら血管変化は出血性変化が頻発していると思われる腫瘍組織部分に認められ，残存精巣組織，白膜，精巣上体に分布する動脈では観察されなかった（写真3，EVG染色）。

診断：内膜肥厚による小動脈閉塞のみられた豚の多発性間細胞種。